

1994 年度 下半期報告書 一橋大学 一橋山岳部

1. 巻機山偵察 10/8,9 (前半 巻機)

メンバー：淵沢、西井

10/8 出発 7:30→9:05 5合目→9:40 6合目→10:40 7合目→11:25 9合目
→13:40 国境稜線への分岐→15:40 幕営

登山口までバスで行く。天気は晴れていないが、曇ってもいない。巻機山の上までは、延々と緩い登りが続く。にせ巻機の近くの無人小屋の下の沢で水を汲む。巻機山を上まで行くが、平たいのでどこが頂上なのか良くわからない。人が結構多い。ハムの団体が来ているようだった。そこまでは人が多かったが、そこから南に行くと、人の影はぱったり消える。細かいアップダウンを繰り返しながら、先に進む。米子頭と柄沢の意打破尾根が急に細くなっていて、スキーで行くには難しそう。柄沢の1つ手前のピークを下りたところでテントを張る。

10/9 出発 5:50→6:30 柄沢岳→9:30 檜倉→12:30 大鳥帽子→13:30 朝日→
15:45 大石沢

西井の飯は安易すぎると文句を言われつつ、出発する。檜倉の一つ手前ピークを過ぎた辺りで道に迷う。結構藪が深いのに先頭にいた僕がいい気になって飛ばしすぎたのが原因らしい。どうにか尾根の上の道に這い上がり、大鳥帽子には無事到達する。白毛門を南に見つつ、東の尾根を下る。登山道が宝川と合流する辺りから、道の片側が険しくなり、トラバースのようにしていかなければならないところが出てくる。春合宿ではここは通らないそうなのでどうでもいいのだが。登山道の終点で、製剤所のおばさんの車をヒッチハイクしてバス停までおくってもらおう。(文責：西井)

2. 個人山行 豆焼沢 10/16

メンバー：古瀬、淵沢、大谷

昨日、秩父鉄道三峰口駅からタクシーで豆焼橋まで入った。当日、道路延長工事のため豆焼橋付近の沢も工事中で新入禁止とのこと。そのことを教えてくれた巡査員は「親切にも」かなり奥地まで我々を車で乗せて行ってくれた。そのため、ガイドブックに書かれているコースの半分くらいの地点から登り始めることになる。古瀬はかなり欲求不満気味である。さすがにこの時季ともなると水は冷たく、滝を直登する気が失せる。後半のナメは快適だった。午後過ぎには雁坂峠に出る。少し色付きはじめた広葉樹の中を西沢溪谷へと下った。（文責：大谷）

3. 冬合宿偵察 寺地山 11/3、4

メンバー：淵沢、大谷、吉武 他は不詳

（寺地山は黒部五郎、北の俣岳の前山 編者注）

11/3 打保の先 10：40 発→11：25 林道分岐→13：25 水の平→14：45 1824m→
15：50 寺地山

タクシーで打保の先まで行く。急登が続く吉武がばてる。寺地山の上りの途中で雨が降り出し、急いでテントを張った。が、淵沢が間違えて2、3人天のポールを持ってきたことが判明。テントにおいては小が大を兼ね、狭い天井に我慢して何とか全員もぐりこんだ。

11/4 出発 6：25→7：30 避難小屋 7：55→8：55 2300m→9：30 避難小屋 10：05
→12：00 1842m→12：45 水の平 13：00→14：40 打保

昨夜降った雪に地面がうっすらと覆われている。調子よく走るように避難小屋に到着。

デポ缶を置いて大谷を残し、偵察に出発。積雪はくるぶし程度。ルーを確認して下山。下りでは肩車で赤布を着けながら駆けおろる。（文責：淵沢）

4. 春合宿偵察 上州武尊 11/7,8

メンバー：淵沢、吉武 （タイム記録は盗まれてしまいました。）

11/7 どんよりした天気。最初川沿いに行ける近道を行くとしたが、すぐに道がなくなり、対岸に新しく出来たリフトの下を歩くが、結局道が見つからなくて少し藪こぎをして引き返し、上の原に戻る。2万5千分の一の地図に載っている川座老いの道はすでに荒れてしまったようだ。尾根に出る最後の急斜面を登る頃から雨。3:30 ごろ避難小屋着。3, 4 畳の小さな小屋である。中にテントを張ろうとしていたら登山者が来たので慌てて畳む。夜は雪が降りものすごく寒かった。

11/8 朝ガスだったが、すぐ快晴。途中鎖場が出ていて何度もアイゼンを着脱する。2 時間半ほどで山頂着。越後、谷川から尾瀬までの稜線と、剣ヶ峰の黒々と青い空に屹立する険悪な姿が飛び込んできた。家の串は細い岩稜で、ここを山スキーで下れるのかと疑う。剣ヶ峰は右から巻くが、急な斜面でトラバースは相当怖そうである。いったん藪こぎの急登で稜線に出て、今度は左側からトラバース。ここは問題ないが、家の串の方から見えた左側（東側）の斜面もかなり急で、スキーでのトラバースはやはりためらわれる。沖武尊から2ピッチで前武尊。下りは急だが、樹林帯の東斜面が滑りやすそう。リフトが1800mまで伸びていて驚く。1700からの斜面を一気にかけて下り、朝日小屋の前でヒッチハイク。結局、剣ヶ峰越えは無理と判断し、本番では中ノ岳から武尊牧場へ下ることにする。（文責：淵沢）

5. 個人山行 会津駒ヶ岳 11/12,13

11/12 野岩鉄道に乗って会津高原駅で下車。途中濃い灰緑色の川の両側から紅葉がせり出してきていて、乗客たちは車窓の風景を楽しんでいた。駅から檜枝岐まではバス。登山日和ではあるが時間の関係で今日はおソバ・ハットウ、温泉、宴会のみ取付の階段の下でキャンプした。

11/13 6:30 出発→9:00 小屋→9:15 山頂→9:25 小屋 9:30→10:45 階段下曇天で時折小雨がパラつく。朝一の急登はつらいが、徐々に足も慣れ、山頂が晴れることを期待してどんどん登っていく。小屋付近の湿原には木の板を渡してあり、少々滑る。また雪が少々あったが、歩くには支障がない。頂上についてもやはりガスっており、何

も見えない。しかも林の中にはゴミが散らばっていた。早々に退散し、一気に下山する。が、吉武はぬれた木の板で転倒する。最後の急坂はカラマツの黄色い落ち葉がぬれて滑りやすくなっており、下りにくかった。午後からは秋晴れとなり、うらめしいのでおソバを食べ、温泉に飽きるほどつかって楽しんだ。（文責：吉武）

6. ボッカ訓練 11/27

メンバー：古瀬、淵沢、吉武、大谷、西井

境橋—御前山—大岳山—白倉

雪合宿に備えてボッカ訓練を行う。石、ビール、ダンベル、コンクリートなどをザックにつめて山を歩く。葉の落ち切った落葉松にちょっとセンチになる面があった。

（文責：西井）実は大谷・・・・

7. 雪訓（富士山） 12/3,4,5

メンバー：古瀬、淵沢、吉武、大谷、西井、田形（OB）

12/3 晴れのち曇り 富士吉田駅 6:05→（車）7:05 馬返し 7:20→8:05 二合目
8:15→9:20 四合目少し上 9:35→10:15 佐藤小屋 11:25→13:00 七合目付近で訓練
15:00→15:40 佐藤小屋

富士吉田から入山。五合目まで行く。

12/4 曇り 佐藤小屋 6:10→8:10 七合目雪上訓練終了 15:00→ビバーク 15:20
七合五杓付近で訓練。他団体に先を越されたこともあってかなり小さな雪渓。雪が少なく、かつ柔らかい。

12/5 曇りのち晴れ 7:10 登頂開始→7:20 中止、下山開始→7:50 佐藤小屋 8:10
→9:40 馬返し 10:10→10:45 中の茶屋 11:00→13:25 駅

強風のため訓練中止。

雪が少ないことは報道により知っており、他の場所で行うことも考えられたが、決行した。我々が安全を確保可能な八合目以下では雪が少なく、かつ柔らかく雪訓に適しているとは言い難い。以後、このような状況においては、富士山で雪訓をする意義はないのではないかという反省があった。（文責：大谷）

8. 冬合宿 黒部五郎岳 12/14～12/23

メンバー：古瀬、淵沢、吉武、大谷、西井

12/14 神岡の駅でビバークする。雪が少しちらついており、明日が心配である。

12/15 早朝タクシーで打保まで。雪のためにタクシーが偵察で行った時より手前までしか入らない。そこからひざ丈のラッセルがはじまる。山道に入るとワカンをつけた。

1250 から先は雪崩の心配はなさそうなので夏道通しに行く。途中で支沢（地図上では1357 地点の上部に書かれている。）に入りそうになるが、すぐ引き返して夏道に戻る。傾斜が急になる頃から腰丈のラッセルが続き、古沢、淵沢、大谷の 3 人でラッセルする。水の平におりる時は赤布のついていた尾根通しには行かないで、途中から尾根の右側面に下りていく。傾斜がきつく雪がゆるいので、足元が少々不安であったが、何とかすすめた。今日のテン場は 1842 の下の方。夕食はスキヤキ。明日からは乾物のみ。

12/16 今日も前記の 3 人による腰までの、ラッセルが続く。1842、1918 の上部の平なところは方向が分かりにくい、赤布もあり、磁石を使いながら進む。寺地山直下で行動を打ちきる。実は寺地山まではそんなに時間はかからなかったので、登ってしまえば良かったという反省が後で出た。夜は着きが冷たく輝いて雪面に反射していた。西の方の山の斜面にはスキー場の明かりが見えた。

12/17 小屋まで深いラッセル。残りの二人も初めてラッセルを経験する。小屋も簡単に見つかり、午後からは明日のためにラッセルをつけておく。小屋からは水が出ていた。

12/18 沈。昨日のラッセルがむなし。雪が降りやまず、風もあり、小屋の中に張ったテントの中でおしるこを食べる。

12/19 沈。

12/20 晴れて稜線付近が見え隠れしているが、出発する。ラッセルを交代しながらすすむ。前にラッセルの後を着けた時は、大きな沢の右岸をいったので、今度は左岸に行く。吉武は空身でラッセルをして荷物を取りに行ったあと、疲れて遅れてしまう。2,350 辺りで曇って風雪が強まったので 2150 あたりにおいてツエルトで待機する。このあたりは少し風がよわまっている。時々晴れ間が見えるだけで風が収まらない。涙をこらえて？小屋まで下る。すると谷から雲が全部上がって来た。予想していた移動高が来たらしく、再び出発。先程の強風がうそのようで、きょうは 2450 の上部あたりにテントを張る。このあたりはクラストしており、下級生のアイゼン歩行の練習をする。夕方は山が赤からピンク、紫に染まっていき、最後に富山湾がくっきり浮かび上がった。風が強くなりそうなのでブロックを積む。

12/21 ここは上部がもろいクラストで下層は親切。歩きにくい。稜線は爽快。後立や黒部の源頭がよく見える。

12/22 アイゼンをつけて稜線散歩。黒部五郎の下で荷物をデポし、上級生 2 人は○荷で登る。傾斜はきつい。登頂。下部では足がもぐるが、上部ではアイゼンがよく効く。気を引き締めて黒部五郎をくだる。神岡○道の下りは少し急で吉武遅れる。ワカンの紐がはずれた。

12/23 下りのラッセルは早めに進む。1カ所先頭が南の尾根に迷ったが、リーダーの指示で方向転換。赤布をみつけて夏道伝いに一気に下山する。帰りは村営バスにらせてもらう。(文責：吉武)

9. 黒姫山山スキー練習 2/14,15

メンバー：淵沢、大谷、西井

2/14 16:30 スキー場発→17:40 テン場着

前日に長野駅で寝て、始発で黒姫駅まで。1日目はスキー初心者の私のためにひたすら下のスキー場で滑りまわる。結局私だけは最後までまともに滑る事も出来ず、もういい

から帰りたいと思いながら、夜の7時ごろ除雪車に追われながら、一番上のリフトの手前まで行き、ゲレンデの分れ目にテントを張って泊まる。

2/15 7:00 起床 8:05 テント発→9:00 尾根→13:30 黒姫山→17:35 スキー場

早めに起きて、外を見ると天気は上々。雲ひとつない。リフトの下まで行くが、整備中でリフトは動かない。結局30分程そこで待つ。リフトもようやく動き始め、揚々と登っていくが、坂が結構きつく、左手の沢を気にしつつ、尾根の上までずっとトラバースしてのぼる。尾根に出るころにはガスが出始め、視界が30メートル程に下がる。しかし、頂上はすぐ近くだということで、とりあえず進む。頂上に着くが、周りがみえない。仕様がなくて直ぐ降りることにする。尾根を下りるところには、雪も降り始め、スキー初心者の私は、キックターンするたびにこける。日も暮れる頃、除雪車に追われつつスキー場の一番下に着く。(文責：西井)

10. 文登研山スキー講習会 2/15～20

吉武

2/15 試験終了後、急いで夜行に乗る。

2/16 (曇り→吹雪)

グループに分かれた後、外で残雪と雪崩の講義を受ける。正月の千畳敷カールでの雪崩遭難の分析をしながらの説明であった。午後から施設の裏手で実技演習。数名を除いて皆、山スキーが出来らしい。

2/17 (晴れ) スキー場に行って実技演習をする。午前中は実技レベルごとに3グループに分かれスキーの練習をする。午後からは各自で練習した。この日の目的はスキーを楽しむことであった。ところで初心者は兼用靴で練習した方が良いとのことで兼用靴を借りて滑ったが、スキー靴と同じように足首が固定されて楽だった。

2/18 (晴れ) 雷鳥バレースキー場。ゴンドラで山頂駅まで行く。そこから大品山まで尾根伝いで up,down を繰り返しながら行く。先行パーティーのトレースが続いており、ラッセルの練習にはならないが、山スキーの初心者にはちょうど良い練習になった。し

かし全行程を通して私のスキー恰好は惨憺たるもので（登高は上達したが）恰好は起き上がりの方だけうまくなった。この日は大品山が幕営地で雪洞造り、イグルー造りをした。その後搬送の仕方を教わり、夜は講師の体験談を聞いて楽しんだ。

2/19（快晴）この日も快晴。やはり先行パーティーのトレースがあり、それをたどる。1500m付近にスキーをデポし、ワカンに履き替えると私たちのパーティーは格段にスピードが上がった。1750m付近は段差があり、補助用のザイルが張ってあった。鉋崎山は傾斜がきついだわかんをはいて太ももくらいのラッセルなので問題はない。山頂からは北アルプスが良く見渡せ冬山で行った北ノ俣岳も遠くに見えた。幕営地に戻るとビーコンを利用しての荷物さがしをした。ゾンデ棒をつついて探すのだが、見つかるまでかなり時間がかかった。

2/20 講師にイメージトレーニングをすると少しは上達すると教わり、実際上達した。一番恐ろしかったのはクラストしたスキー場の斜面であった。

感想)) 危急時対策にもっと力を入れるべきだと感じた。スキー技術の上達にはあまり役に立たないとおもう。（文責：吉武）

1 1. 八ヶ岳合宿 2/21-2/26

メンバー：淵沢、吉武、西井、田形OB

2/21（晴れ）渋の湯発 12:55→14:55 黒百合ヒュッテ

全員予定通り茅野に到着したものの、間違っって美濃戸行きのバスに乗ってしまい、いったん茅野に引き返してタクシーで渋の湯に入った。渋の湯山荘で宿の人と一悶着起こした後、川で水を汲んで出発。中々よいペースだが、西井が遅れる。しわくちゃのテントにポールを通すのにてまどったが、無事張ってレトルトを食べて寝る。

2/22（晴れ）起床 5:00—出発 6:15→7:25 東天狗 7:40→8:00 西天狗 8:10→9:05 黒百合ヒュッテ 9:40→10:25 渋の湯→茅野駅

中山峠で素晴らしい朝日を見ながらアイゼンを付ける。急な斜面でみあげるそらには有明の月が美しい。東天狗の上りは最初のっぺりした雪壁で、疲れる。それを超えると大

きな岩が出てくるが、全然大したことはない。それでも岩が出てくると吉武が遅れる。東天狗からは、一方にひょいと手を伸ばせば届きそうなところに真っ白な西天狗がひかえ、一方に雪の着き方がちょっといやらしい稜線が硫黄に向かって続いている。西天狗の登りには、トレースがたくさんあったが、自分でラッセルをするとなると結構疲れそうである。山頂に着くと、のそつと阿弥陀が顔を出しているのが見え、周囲を三つのアルプスが囲み、蓼科がのんびりと雪をかぶっている。わいのわいのと写真を撮り、引き返す。帰りは天狗のお庭を通ったが、池を囲む岩の配置が絵のように美しく、幻想的である。下山はさすがに速く、快調に進む。渋ノ湯の温泉は檜造りで味わいがあるが、高かった。茅野駅で西井とお別れ。夜、風邪で来られない大谷が共同装備を持ってきてくれる。

2/23 (晴れ) 美濃戸口 11:25→12:45 美濃戸山荘 13:00→14:45 赤岳鉱泉

明け方、淵沢が寒さに耐えきれず、茅野駅の待合室のストーブにへばりついていて間に、財布を地図や山行メモ、資料ともども盗まれてしまった。警察に連絡して被害届を書いてから、急いで買い出しをしてバスに駆け込む。ずしりと重い荷をこれもボッカと耐えながら鉱泉荷着いた時はもうへとへとである。赤岳山荘のトイレは立派に改築されていた。

2/24 (晴れ) 起床 5:00—出発 6:40→7:10 行者小屋→8:20 阿弥陀との分岐→9:00 赤岳 9:15→10:55 赤岳鉱泉 12:15→13:50 氷爆地点→16:00 帰幕

快晴無風。例年のことを考えると、赤岳直下でさえ微風程度というのは逆に気持ちが悪い。突風にあおられながら岩稜を歩くことを予想していたので、ほっとすると同時に来年以降のことが心配になり、ここは例年体がよくめくほどの強風が吹くのだと吉武に良く言い聞かせる。相変わらず吉武が右のトラバースが怖いだの何だのとうるさいが、難なく赤岳に到着。権現がどっかと足元に居座っていて、そこからのびる稜線に思わず目が吸い寄せられる。残念ながら富士山は霞んでほとんど見えないが、間近に見える鳳凰三山をはじめとする雪を頂いた山々の雄大な景色に委託感激する。テントに戻ると、すでに田形OBが到着されていた。一休みした後、アイスクライミングに出発。以下不詳

2/25 (曇り) 起床 4:50—出発 6:25→7:00 行者小屋→8:10 阿弥陀との分岐→

8 : 55 赤岳 9 : 25→10 : 30 三又峰手前→13 : 40 硫黄岳→14 : 35 赤岳鉱泉

朝からどんよりした天気、ネズミ色をした雲が低く垂れこめていたが、時々雲の切れ目に稜線が現れるのを慰めにして出発する。今日は早めにアイゼンを着ける。雪交じりのやや強い風が北から吹き付けていたが、赤岳直下ではまたもや拍子抜けするほど風が弱く、なんとのおんぴりと休憩を取ってしまう。山頂はさすがに風が強く、小屋の陰で登攀具を身につけるが、吉武がギャーと叫んでハーネスをテントにわすれてきたと騒ぐ。田形OBがシュリングで代用しようと提案し、二人で何とか工夫して吉武をシュリングでぐるぐる巻きにする。ガスの中それでも淵沢がルートを覚えているので順調に進み、昨年ザイルを張ったところも雪が少ない上にしっかりとしたトレースが付いていて、問題ない。途中から雲が切れてきて、景色を楽しみながらの稜線散歩となる。横岳のトラバースで吉武に確保をやらせ、淵沢が練習と称してハーケンを打ちながらトップで行く。強風で有名な硫黄の石室付近も全然大したことはなく、無事終了。ただし尻セードは程々に。

2/26 (雪) 起床 5 : 30—出発 7 : 20→8 : 10 美濃戸山荘→9 : 25 温泉

雪の中快調に下る。つるつるで来るとき怖い思いをしたので、美濃戸山荘からアイゼンを着けたが、これは正解であった。バス停の近くの橋から少し上流にある山の斜面にできた氷の滝でアイスクライミングをしているパーティーがあり、こんなところがあったのかと感心しながらしばし見物。時間があつたので一つ先のバス停で温泉に入った。

(文責：淵沢)

1 2 . プレ春合宿(蔵王) 3/3—3/8

メンバー：淵沢、大谷、吉武

3/4 (曇り) 蔵王山頂駅 9 : 15→9 : 40 地藏岳→17 : 30 地藏岳付近の小屋

ロープウェイを利用して蔵王の温泉街から山頂駅まで上がる。スキーを履き、視界がほとんど効かない降雪の中出発。付近の地形がなだらかなため迷う可能性が高いことと急ぐ必要がないことから、地藏岳にテントを張ることとする。ところが 17 : 00 頃、蔵王

スキー場のパトロール員が現れ、危険であると理由から、この山行きの幕営は禁止されていると告げる。無線を通してのスキー場との協議の結果、山頂駅まで戻ることにした。

主な原因は我々が登山計画書を提出していなかったことにある。次の日登山計画書を提出することで入山を「許可」されることから、登山を許可制にしているような条例は考えにくい。地蔵岳山頂がスキー場のパトロール範囲であったことも以上のような結果になった要因だろう。ともかくもこの晩は小屋にとめてもらうことになり、次の日に山頂駅へ出向いて計画書を提出するよう言われた。

3/5 (雪) 6:00 起床—7:00 小屋発→7:15 山頂駅 9:00→12:45 熊野岳

山頂駅で計画書を提出する。全行程の終了時に電話連絡するように要求された。警察にも同様に連絡するよう指示された。雪交じりの強風の中、やはり視界はきかず、肌は突き刺さるように痛い。昨日とほぼ同じ条件の中、熊野岳まで進む。しばらく避難小屋を探すも見つけることが出来ず、熊野神社まで戻る。神社の囲いに沿って雪が吹きだまっていたので、それを利用して雪洞を掘る。神社付近で“キジをうつ“事には見えざる者への畏怖から引け目を感じるのがやはり人間というものであろうか。この強風の中では神社の建物を風よけに使うのも仕方がない。教々しく一礼するのがせいぜいであった。

3/6 (雪)4:30 起床

この日は沈。午後のあるひと時、南方の視界がわずかに開け、真南に見える赤旗が3,4本見えた。このことは我々が実際にいる場所と我々がいると思っている場所との不一致を我々に知らせてくれた我々が恭しく頭を下げていた建物は避難小屋であった。よって、3/5の熊野岳および熊野神社は避難小屋と訂正しなければならないだろう。

3/7 (雪)5:05 起床—7:22 避難小屋出発→8:15 刈田岳→11:00 前山→11:52 杉ヶ峰→12:25 芝草平→13:52 屏風岳→14:50 南屏風岳→17:45 不忘山

天候の回復を待って避難小屋を出発。晴天の中でスキーを滑らせていく。しかし屏風岳に達する頃から雪のため視界が悪くなる。南屏風岳から不忘山の間には小ピーク

(1732m)があり、そこから尾根までの下りが急であって、かつ、地図読み能力の不安から現在地についての一致した認識がなされなかったことにより、南東に抜ける尾

根を求めて一時間ほど、周辺を探し回ることになった。熊野岳の件といい、この件といい地図読みがまだまだのパーティーである。不忘山への登りは、腰まで埋まる深い雪と薄く雪の積もった岩が交互にあり、スキー着脱の判断が難しい。やっと不忘山に着いた時は日も暮れ、辺りが暗くなりかけていた。少し下ってテントを張る。

3/8 (一行欠落)

時々見ることのできる遠景と残された他団体の赤布を頼りに下る。スキーには絶好の斜面である。斜滑降とキックターンの繰り返しでスキー場まで下る。うーん、なんかラッセルの方が早く下れるような気がする。とりあえず何とかスキー場上まで辿り着く。安堵。しかし、果たしてスキー場で繰り広げられる光景は、上級者コースでは到底歯が立たずに転びまくる吉武、大谷と北海道仕込みのテクニックを駆使して余裕で下る淵沢戸の奇怪な対照であった。(文責：大谷)

1 3. 春合宿(上州国境～上州武尊)3/18-24

メンバー：淵沢、大谷、吉武

3/18 (雪)六日町 6:50＝バス 8:25 清水→12:35 井戸の壁上部→14:00 1350m→16:00 ニセ巻機→16:40 避難小屋 林道を少し行ってすぐにスキーを着ける。吉武がひっくり返っている間に後続に抜かれる。それでもスキーは速い。しかし右に行き過ぎて米子沢のすぐ隣を流れるべつの沢沿いに行ってしまう、その沢と米子沢を渡ってようやく尾根に取り付く。抜いたはずの後続隊はすでに陰もみえない。しかし、お陰でトレースはバッチリで、時々ガスの切れ間に現れる天狗岩を眺めつつ、いよいよ最後の急登である。このころになると吉武はもうフラフラで、強風にあおられながら死んだように付いてくる。吉武がニセ巻機の山頂で天気図をとり、凍った下りでは数え切らない程転びながらようやく小屋に到着。回りは既にテント村である。

3/19 (ガスのち晴れ)

起床 4:30-7:12 出発→8:15 巻機山→10:55 米子頭山→柄沢山

朝、ガスなのでしばらく待っていると突然ガスが晴れだし—快晴。思わず歓声上がる。巻機の登りはガリガリで、急になるとスキーでは危険だったので、後一步というところでスキーを外す。柄沢への稜線がくっきりと空に映える。稜線上はこの後もすべて硬くしまっていて、はっきり言って歩いた方がずっと速かった。稜線からは越後の山や谷川の剣塑な容姿が望め、尾瀬の山々が寄り添うように並ぶ。空の青と雪の純白のコントラストが眼にいたい。しかし、柄沢までもう少しのところ突然ホワイトアウト。雪庇と空の境目がかろうじて見分けられる程度である。1809～の下りで左の稜線に入りそうになったがすぐに気づいてトラバースで稜線に戻る。本当はそこが幕営適地だったが、淵沢の勘違いで柄沢の向うまで行こうとする。柄沢からは急な下りで、ガスってでは降り口がわからず、結局山頂に立派なブロックを作って泊まる。

3/20 (晴れ)

起床 4:30—6:15 出発→7:55 檜倉乗越→10:45 檜倉山→13:30 大鳥帽子→14:30 宝川源頭のコル

朝は快晴で。大鳥帽子までの稜線もはっきりわかる。やはり前日下手に無理して下らないで正解であった。下りはかなり急で大きな吹きだまりがある。エスケープルートの西尾根を確認しながら大きく回り込んで降りた。バシバシ篠竹を打ちながら下る。途中柔らかい雪の上にふわふわの雪がツギいやすい急斜面があったので、ザイルを出す。その後もスキーをかついかなり重くなった荷物と吉武の体力、吉武がトラバースを怖がっていることも考え、斜面が急で沢までさげぎるものが何もないということ以外はさして危険でもなく、アイゼンが良く効くところで何ピッチかザイルを出した。トレースが付いていたのでルート取りはスムーズに行ったが、雪庇かズボズボ嵌るブッシュ帯とかいうところも何か所もあり、なかなか怖い。檜倉からの下りは気温の上昇のため不安定になった雪がいや*****てくる吉武に淵沢は技術的に不安を感じる。やっと大鳥帽子に到着。J. P. へののっぺりとした雪壁は登るきも失せる膨大さだ。宝川はいかにも滑りやすそうである。十分景色を堪能したのち、淵沢と大谷はスキーで、吉武は壺足で下る。雪庇からの雪崩が怖いのでできるだけ稜線上を滑る。淵沢、吉武、だいぶ遅れて大谷の順でコルに到着。テントを張る。この日ザイルを使って、淵沢が歩き始めた時、ふたをし忘れて銀マットを沢に落としてしまった。

3/21 (晴れ) 6:05 出発→時間不詳 布引山→13:50 宝川の橋→16:30 久保
17:10→ 17:?? 山口

この日も見事に快晴。この山域としてはあまりに天気恵まれすぎで却って気持ちが悪い。朝のガリガリの斜面に苦勞しながらも順調に進む。1626mのトラバースで、“まっすぐ”という言葉がうまく通じず、吉武が滑って立木にぶつかって止まる。スキーを外して歩かせる。途中まで降りると、すぐに快適な斜面。直線プラスキックターンなどではなく、初めて軽やかに弧を描いて滑る事が出来る喜びにこれまでのすべての苦勞が報われた気分になる。初めてシールを外して滑った後 1350mの南に向かうはずだったが、大谷・吉武とも把握しておらず、先に滑った淵沢を見失った2人が瀬之沢方面に下ろうとし、戻るのに手間取った。下の方に行くにしたがい針葉樹林となり、うざったい。途中でスキーを外してワカンを着ける。しばらくラッセルしていた淵沢がハマったのを機にやけになってスキーを着けたが、大失敗。こけつまろびつの2人についてようやく林道に出た。林道はところどころ崩れたり、トンネルがあったりして何度もスキーを外し、面倒くさい。温泉に着いたころカラスの群れがギャーギャーうるさいので死体でもあるのかとドキドキしたが、なんと巨大なゴミの山であった。下山の喜びも台無しである。買い出しを済ませ、バス通りをてくてく歩き、ようやく食堂を見つけ、天気予報を見た後、スキー場の駐車場にテントを張った。

3/22 (曇り時々晴れ) リフト上 9:25→10:30 1518m→11:55 1192m手前→
14:30 1700m

吉武がリフトに乗るのに少し手間取ったが、順調に登る。途中何度か急登があり、スキーを外すが、前半と違って柔らかい雪の上を大体スキーで行く。避難小屋からは稜線上ではなく、いったん沢に下りてしばらくその沢を詰める予定だったが(沢と稜線は合流するが、稜線の上が歩きにくいし、雪崩の危険もあるため)、沢に下りようとした淵沢が滑落、10mほど下の沢底まで落ちたので大谷に稜線上に行くように指示、淵沢はそのまま沢を詰める。しかし、淵沢がしばらく行くと、後方で吉武のコールが沢の方から聞こえるので、何かと大谷にコールをかけ、事情を聴くと、淵沢の後を勝手に付いてきて同じように滑落し、吉武も沢を詰めることにしたらしい。てっきり大谷と一緒に稜線を上がっていたと思っていた淵沢は爆発。大谷は淵沢が気づいていたと思っていた。吉武は淵沢が滑落したのではなく、豪快に滑り降りたのだと思い、危険だとは思わなかった

た。また、その後大谷に指示した言葉を後をついて来るようにという全く逆の方に勘違いしたということが原因であった。以後こういう意思疎通の欠如が内容、十番に話し合い、しばらく行ってからテントを張った。

3/23 (曇り時々雪) 4:30 起床-10:35 テント発→12:00 1984 付近→13:35

沖武尊→16:55 1940 付近

上の方がガスに覆われているので、天気予報を聞きながらしばらく待機。今日中に武尊越えが出来なければどの道引き返してこなければならぬので出発をためらうが、それほど降水確率も高くなく、武尊はあまり荒れる山ではないので出発する。1984 に着くと次第に雲が晴れ始める。その先はかなり急でワカンを履いたままでは危険であった。大谷は後続の苦労などお構いなしに嬉々としてラッセルに打ち興じている。ちょっとした雪庇を越えて武尊に到着。あらかた雲の中だったが、中ノ岳から前武尊までは見渡せる。越えるべき最後のピークに立ちかかるといもひとしおであった。中ノ岳までは普通武尊牧場方面に降りる場合、左側をまくのだが、恐そうだったので右側に行く。のっぺりとした雪の斜面がちょっと雪崩そうだったが、無事稜線に出た。そこから中ノ岳まで少し下ってトラバースしようとしたが、大きくえぐれた沢状の斜面や岩にぶち当たり少し引き返して直上して夏道に出る。そこからの下りは雪質は良いがとにかく急で、後ろの2人はこけながら何とかついてくる。2050 からの核心部でスキーを外し、雪がしまってアイゼンがよく効く、という話とは打って変わったぐずぐずの道にアイゼンもはずし、ザイルを3P出した。下りきった1940 付近で幕営。夜半風が強かった。(文責:淵沢)

14. 安達太良山 3/27 快晴 吉武、筑波大V. W. の一人、東北大V. W. の一人

早朝、東北大の人をひろってあだたら高原スキー場に行く。ゴンドラに乗って五葉松平。

1350m 付近～スキーを着けて登り始める。赤布が付いているので尾根道で迷うことなく簡単に頂上へ行けた。しかし、ゴンドラで降り立ったところは無風であったのに、1519m を越えた所から強風が吹き付けてきてつらかった。頂上直下に荷物を置いて小さな岩を登ると頂上に着く。風が強くて寒いので、岩陰で休憩する。帰りは本北道を換えるが、沢の方にわたって行った。2人はスキーがとてもうまい。私は斜滑降、キック

ターンを繰り返しながら、苦勞しつつ、付いていくことになる。2つの沢の間に入らないようにして五葉松平にすべりこみ。2万5千分の1の地図にある一番上のリフト上部へ降りた。帰りに岳温泉の銭湯に入ってさっぱりした。(文責：吉武)